10
October
2026

［月刊］キリスト教書評誌

本のひろば

HON-NO-HIROBA



ISSN 0286-7001
一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可
2026年10月1日発行（毎月一回1日発行）
第826号

出会い・本・人
「本と出会う歳月」 宮嵜 薫

特集 シリーズこの三冊！
責任について《学びほぐす》なら、この三冊！ 川本隆史

本・批評と紹介
加藤常昭 著
日本伝道論 井ノ川 勝
牧田吉和 著
改革派説教学 小泉 健
石橋秀雄 著
幼子とともに 大豆生田啓友
長尾 優 著
私は告白する、私の神を 森 一郎
大韓聖公会 全国女性聖職者会 著／ドミニカ朴・美賢 代表執筆／関 澄子 訳
私たちの司祭 吉谷かおる
田矢廣司 著
遠藤周作が森田ミツに語らせた神学 城前和徳
崔 善愛 著
私の「風速計」 志村 真
朴 清民 著
主イエスと共に歩む旅路 横田法路
岩本遠億 著
完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った 西原智彦
小林孝吉 著
滝沢克己 インマヌエルの風景 芝田豊彦

◆近刊情報
◆書店案内

新教出版社 〒112-0014 東京都文京区関口 1-44-4 Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
HP：http://www.shinkyo-pb.com, email： eigyo@shinkyo-pb.com

自由と喜びの地平 イエスの七つの譬え

川島重成 著　名著『イエスの七つの譬え』（三陸書房版）、待望の復刊！

福音書記者の編集の背後にさかのぼって譬えの原型を復元し、万人に開かれたイエスの真のメッセージを味わう。

9月17日　四六判・定価2530円



日本基督同胞教会の歴史と資料

日本基督同胞教会史研究会 著／富坂キリスト教センター編

日本基督教団合同まで静岡、小田原、渋谷、名古屋、大阪、神戸など25教会、神学者の有賀鉄太郎を擁した異色の群れの貴重な歴史。

9月18日　B5判・定価2200円



イザヤ書註解Ⅲ 28—39章

ジャン・カルヴァン 著／堀江知己 訳　深いヘブライ語の造詣に基づいて使信を読み解き、キリストとの関係を強く意識しつつ信仰者への勧告と奨励で各章を結ぶ。あたかも説教のような熱量を込めた註解。全5巻。

A5判・定価7920円

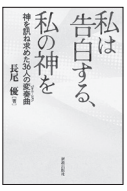


私は告白する、私の神を

長尾 優 著　**神を訊ね求めた36人の変奏曲（バリエーション）**

多くのキリスト教書を装幀してきた人気デザイナーが、辻邦生、スピノザ、リルケ、山本周五郎、アーレント等々私淑する36人の先達を選び、既成の宗教の枠に収まらない彼らの屈曲に満ちた求神の道のりを、共感をこめて綴ったエッセイ集。

四六判・定価2420円



滝沢克己 インマヌエルの風景

小林孝吉 著　**キリスト者的生涯と希望の思想**

インマヌエルの原事実に固着し、自由と希望を追求してついに独自の純粋神人学に到達した神学者。その人生と思想を描き切った渾身の評伝。

四六判・定価3850円



共観福音書問題の迷路を抜ける

Qなしで済ます解決法　**マーク・グッドエーカー著／河野克也訳**



Qなきあとの新しい風景！ 長年共観福音書研究の前提とされてきた「二資料説」に挑む。架空の資料を仮定せず、テキストの前後関係だけで謎を解き明かす、気鋭の聖書学者グッドエーカーの画期的アプローチ、待望の邦訳！　**9月25日**　A5判・定価4290円

出会い 本 人



本と出会う歳月

宮嵜　薫

図書館が好きだ。本を選ぶ自由、読む楽しみ、静謐な時を提供してくれる聖なる空間。そこで出会った様々な本たちによって養われて、今の自分がつくられてきたように思う。

なかでもカナダの作家モンゴメリの『赤毛のアン』シリーズは、十歳頃の私を感化し、世界観を明るく広げてくれた。主人公の快活さや空想力、聖書の言葉や美しい詩に魅了された。さらに物語にあふれる教会共同体に連なる人々の良心に触れ、それまで縁のなかったキリスト教に自然と憧れるようになった。今読み返しても、この良書のもつ伝道する力を感じる。

二十歳頃、大学の図書館で仏作家マルグリット・デュラスの初期の著作『静かな生活』に出会い、彼女の作品に惹かれた。卒論はデュラスで書いた。のちに『愛人（ラマン）』で世界的にブレイクする前のことである。デュラスは、世の不条理や日常生活に潜む人間の狂気を、空白の多い独特の文体で綴る。その作風はモンゴメリと対照的だが、矛盾や苦悩に満ちた人生を彼女なりの真摯さで描き出す。拙い卒論作成以来、デュラス研究はずっとライフワークにしようと定めている。

大学卒業の少し前に教会で洗礼を受け、憧れていたキリスト者となった。そのずっと後に神学大学に学んで牧師になり、あわせて旧約聖書を専攻し研究する者となった。以前にまして図書館のお世話になっている。出会いは遅かったが、歴史と文学と神学の融合たる旧約聖書の奥深さ・面白さは無比だ。複雑で謎多く、両義的で多様でありながら、神と共なる人々を描いている。たしか旧約を自分の専攻と決めたころだったか、あのデュラスが旧約聖書を愛読していたことを知って、私はとても嬉しかった。

歳月をかけて出会った好きな本、惹かれた作家が、わが内に一本につながっていく。この感じは心地好い。今は、旧約文書を書いたのはどの時代のどんな人？と思い巡らしながら、天の空を仰ぎみる。（みやざき・かおる＝東京神学大学 常勤講師）

▼シリーズ　この三冊！

責任について《学びほぐす》なら、この三冊！

川本隆史（かわもと・たかし：東京大学・東北大学名誉教授／カトリック広島教区信徒）

四二年間の大学勤めを終え、郷里に舞い戻っている。本年八月六日の広島原爆忌も、爆心地から三キロ弱の生家で迎えた。「平和記念式典」のテレビ中継からは、《責任》という語が三度も耳に届いている。ブックガイドを始める前に、まずその声たちを再生しておこう。

一番手は、広島市長・松井一実氏の「平和宣言」の一節――「核保有国の為政者の皆さんは、核軍縮に大きな責任を有しているのです」（傍点は引用者、以下同様）。続いて「私たちには、広島のこどもとして、行動する責任がありま す」と、小学六年生二名の「こども代表」が読み上げた「平和への誓い」。三番目が「私もまた、ここ広島において、安全で安心して暮らせる社会を次世代に贈る責任を痛感しつつ、『核兵器のない世界』と恒久平和の実現に向けて力を尽くすことを、お誓い申し上げます」と表明した、内閣総理大臣・高市早苗氏の「あいさつ」の結びである。

「責任」という発語や字句が私たちの耳目に入るのは、もちろん八月六日だけではない。私たちが毎日のように見聞きし、意味も使い方も分かっているつもりのこの二字熟語ではあるのだが、いざこれを別の語句に置き換えて噛み砕こうとすると、途端に行き詰まりはしないだろうか。そこで「責任」の《学びほぐし》の出番が来る。「まなびほぐす」は、哲学者の鶴見俊輔さん（一九二二―二〇一五）が英語の動詞 unlearn に与えた絶妙の訳語だった（『教育再定義への試み』岩波現代文庫、二〇一〇年）。unlearn とは、学んで覚えたことがらを解きほぐし編み直すことにより、改めて身に着け暮らしに即した活用へとつなげる営みを謂う。そうした《学びほぐし》を「責任」を目当てに企てた経験が、私にはある。高等学校公民科に設けられていた「現代社会」という科目の教科書を分担執筆したときのことだ。「民主社会の倫理」という担当節の三つ目の単元を「権利と責任」と題した私は、そこで「責任」という名詞を「応答する（レスポンド）」という動詞へと差し戻す《学びほぐし》を敢行した。その箇所を抜き書きしてみる。

「日本語の『**責任**』も、漢字だけ見ると『責める』に『任せる』と書くので、まわりから責められて押しつけられた任務といった重苦しい雰囲気をただよわせてしまう。しかし、英語で責任にあたるのは『レスポンシビリティ』――わたしによびかけてきた相手にこたえること――という単語である。相手にこたえなければならないという点では責務であるが、こたえることによって自分の能力を実現できるという面に注目すると、責任も一種の自由（「～への自由」）に含めることができる。［……］相手の権利主張に耳をかたむけ、なるほど正しい主張だと判断したら、相手のいい分が実現できるよう行動に移ること、反対に相手の主張がふに落ちないときには、そこで会話を打ち切るのではなく、どこがわからないのか、筋が通らないのかをことばで説明すること――『責任』を果たすとは、そうした肯定なり否定の**応答を続けること**なのである」（河合秀和監修『現代社会［地球市民として生きる］』教育出版、二〇〇二年三月二〇日検定済、一〇七頁）。

本題に入る。責任とはどういうことかを《学びほぐす》ための恰好の手引きとなる新書と「戦後責任」および科学者の「社会的責任」のあり方を問い詰めた二冊の文庫を、簡潔に紹介させてもらう。

大庭健『「責任」ってなに？』（講談社現代新書、二〇〇五年）

本書は、「責任」の概念分析をイントロに置き、「責任（リスポンシビリティ）とは、第一次的には、互いに応答（リスポンス）が可能だという、間柄の特質」（二八頁）だと端的に定義して、これを次のように言い換える――「責任がある、ということは、裁判所から灰色の呼び出し状が来ることでもなく、弁済や配慮の負担を課されることでもなく、なお呼応可能な人-間でありえている、という悦ばしい報せ〔＝「福音」〕なのである」（三〇頁）と。次いで、責任の「条件」、「主題」、「主体」といった問題群の《学びほぐし》を試み、「いじめ」や「戦争責任」にまで説き及んで、本論をこう結ぶ――「責任がある、ということは、声として聞き届けられなかった呻きに囲まれつつ、なお、おずおずとしてであれ、〔社会システムが聞き流そうとする〕雑音を発しうるし、届いた雑音を入力に変換〔して応答を促す「声」として聴取〕する余地もある、ということである」（〔 〕は引用者）。

五歳年上の倫理学者・大庭健さん（一九四六―二〇一八）は、ことばの真の意味で私の「学兄」であり、八年前に先立たれるまでの三四年の長きにわたり「現代倫理学研究会」なる小さな学びのサークルを協働運営してきた。ちなみに、『福音と世界』一九七二年三月号の力作「和解と〈闇の力〉――信仰の私事化の克服に向けた和解論の社会倫理的展開へ

の一試論」でもって活字論文デビューした当時の著者は、日本基督教会浦和教会員として「バルト的正統」を自任していた。こうした本人の《原点》の在処（ありか）は、あまり知られていない。

高橋哲哉『戦後責任論』（講談社学術文庫、二〇〇五年）

大庭さんの新書と同年に同じ出版社の文庫に収められた作品だが、もとの単行本は一九九九年の刊行になる。「アジア太平洋戦争終結五〇周年に前後して起きた、日本の戦争責任、植民地支配責任、そして戦後責任をめぐる大きな論争の中で［……］具体的な歴史の現実から決して離れることなく、同時に、できるだけ原理的に『戦後責任とは何か』ということを考えてみたかった」とする執筆のモチーフが、のちに明かされている（「学術文庫版へのまえがき」）。

大庭さんと同様に高橋さんも、「応答可能性としての責任」に立脚しつつ、「すべての人間関係の基礎には言葉による呼びかけと応答の関係がある」（三一頁）、「人間はそもそもresponsibleな存在、他者の呼びかけに応答しうる存在である、responsibility つまり応答可能性としての責任の内にある存在である」（三二頁）と論じ進めていく。

本書所収のいくつかの論考は、批評家・加藤典洋さん（一九四八―二〇一九）との間で交わされた「歴史主体論争」を背景としている。「三百万の自国の死者への哀悼をつうじてアジアの二千万の死者への謝罪にいたる道が編み出されなければ」ならないと訴える加藤さんと「侵略者である自国の死者への責任とは［……］彼らとともにまた彼らに代わって［……］謝罪や補償を実行することでなければなるまい」と主張する高橋さんとの論戦の勝敗ではなく、その経緯をくまなく丁寧（ケアフル）に《学びほぐす》こと、そのためには加藤さんの『敗戦後論』（ちくま学芸文庫、二〇一五年）とジャッジ役の内田樹さんの『ためらいの倫理学――戦争・性・物語』（角川文庫、二〇〇三年）とを合わせ読むとよかろう。

唐木順三『「科学者の社会的責任」についての覚え書』（ちくま学芸文庫、二〇一二年）

底本は評論家・唐木順三（一九〇四―一九八〇）の遺著として、一九八〇年に上梓された（著者は草稿を「原爆に抗議する覚書」とも略称していたそうだ）。第二次大戦後の国際的な科学者平和運動を牽引した「第一回パグウォッシュ会議声明」（一九五七年）に盛り込まれた「科学者の社会的責任」提言への違和感を起点に据えて、当該議論の広がりと変質を丹念に追いかけ、こう結ぶ――「科学者たちは『核兵器は絶対悪なり』という判断、価値判断を社会一般に対して下しながら、科学者自身に対しての、或いはその研究対象、研究目的に対しての善悪の価値判断を表白することは稀である。

物理学者が己が社会的、時代的責任を表白する場合、単に善悪の客観的判断ばかりでなく、自己責任の問題、『罪』の問題にまで触れるべきであるということが、現在のむしろ当然であり、そこから新しい視野が開かれるのではないか」（文庫版九五頁以下）。

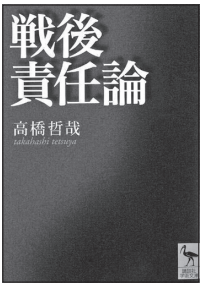
四一年も昔、私は雑誌『理想』一九八五年九月号に「科学と倫理のあいだ――『科学者の社会的責任』をめぐって」という一文を寄せ、日本学術会議の「科学者憲章」（一九八〇年四月）と唐木の所論に対する反響・反論をサーベイし、さらに高木仁三郎・花崎皋平両氏による「社会的責任」の捉え返しにまで立ち入った。その三六年後に勃発した「福島第一原発事故」の衝撃を受けとめ、宗教学者・島薗進さんの周到な解説を付して文庫化されたのが本書である。近代科学にはらまれた「罪」という難問を《学びほぐす》よすがとして一読を勧める。

番外に、現代世界に対するキリスト者の「責任」の《学びほぐし》を促す文書二点――**「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」**（一九六七年三月二六日）と教皇ヨハネ・パウロ二世が発した**「平和アピール」**（一九八一年二月二五日、広島平和記念公園にて）を推したい。後者は「過去を記憶することは未来に対する責任を担うことです」と繰り返し強調している。



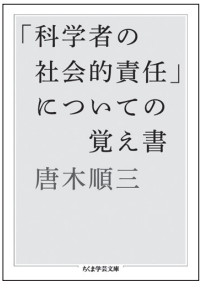
講談社現代新書 1821
『「責任」ってなに？』

大庭　健：著
講談社
2005 年刊
新書判
264 頁
814 円



講談社学術文庫 1704
『戦後責任論』

高橋哲哉：著
講談社
2005 年刊
A6 判
288 頁
1,056 円



ちくま学芸文庫
『「科学者の社会的責任」についての覚え書』

唐木順三：著
筑摩書房
2012 年刊
文庫判
176 頁
990 円（版元品切）

日本伝道を阻む「壁」とは何か？

〈評者〉井ノ川　勝



日本伝道論
加藤常昭著

「教会は大丈夫だろうか」。死と向き合いながらも、最後まで祈りの中心にあったのは、日本の教会の将来であった。加藤常昭先生が逝去されてから二年が経った。教会の課題と直面する度に、加藤先生ならどのように捉え、考えられただろうかと思う日々であった。そのような時に、加藤常昭著『日本伝道論』が出版された。私たちが直面する伝道の課題に、加藤先生の語りかける声が聞こえて来る。

本著には八編の講演と一つの論文が収められている。第一部「日本伝道論」には、「日本に生きる教会の課題――日本伝道論」「日本人と罪の問題――日本伝道論において罪を問う」「日本人と罪」、第二部「日本における教会形成のために」には、「長老の牧会の務めについて」「受洗志願者への試問について」「長老会の任務――教育について」「洗礼と聖餐――『ハイデルベルク信仰問答』を手がかりとして」「私たちの教会の伝統に学ぶ――植村正久と高倉徳太郎」。これらの講演と論文は、神奈川教会連合長老研修会、信徒研修会、鎌倉雪ノ下教会全体集会で語られたものと、改革長老教会協議会『季刊教会』に執筆されたものである。一九七七年から一九九二年の文章であるが、今日の教会の課題、日本伝道の課題に、鋭く切り込んでいる。一貫しているものは日本伝道への「危機感と情熱」である。

加藤先生の生前の最後の著書は、『慰めとしての教会に生きる』（二〇二三年）である。今回の書物の各講演を貫いているパースペクティヴも、現代日本において、「慰めの共同体・教会」を形成する意味と課題である。このパースペクティヴは、最初の神学論文集『福音主義教会形成の課題』（一九七三年）から一貫したものである。日本伝道を阻む壁がある。しかし、壁には急所がある。その急所こ

そ、「人間の罪」である。「罪の感性」を知った時、教会が語る言葉も皮膚感覚に訴える「霊性の感性」の言葉となる。生けるキリストの罪の癒しを告げる、十字架の贖罪の言葉となる。植村正久、高倉徳太郎は「霊性の感性」の言葉を語った。先達の説教の伝統を学び、受け継ぐべきである。

「慰めの共同体・教会」は、ご復活の主キリストから託された「鍵の権能」を行使する使命に生きる。「罪の赦し」を告げる権能（戒規）を授かっている長老会が問われる。一人一人の魂と向き合い「慰めの対話」をする。そのために長老会は主の弟子としての訓練を受けなければならない。長老会の使命には、「牧会・魂への配慮」「受洗志願者への試問」「教育・戒規と結びついた教会生活の訓練」「洗礼・聖餐を土台とした慰めの教会の形成」がある。このような長老会の訓練は、一つの教会を越えた地域の複数の教会でなされる。晩年、加藤先生は、ボーレンの『説教学』の訳者である以上に、トゥルンアイゼンの『牧会学』の訳者であることを強調された。日本の教会が「慰めの教会」になり損なっていることに痛みを覚えられた。「慰めの教会」は主の憐れみと悔い改めに生きる「罪人の教会」である。罪を犯した者をいかに主の憐れみに触れさせ、悔い改めへと導き、教会の交わりに生きる者とするかが課題となる。そのためにも、説教と聖餐を通し、キリストのいのちに触れ、しなやかな足腰に生きる教会となることが求められる。一つ一つの講演、言葉から、日本伝道と教会形成に苦悩する私たちへ、著者の声援の祈りと問いかけが聴こえて来る。

（いのかわ・まさる＝日本基督教団金沢教会牧師）

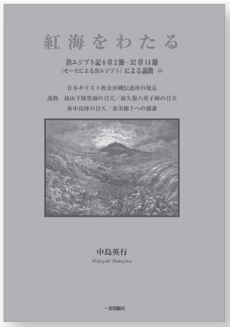
（四六判・三四二頁・定価三一九〇円・教文館）

Soli Deo Gloria

紅海をわたる

出エジプト記6章2節―32章14節による説教 中

中島英行
NAKAJIMA Hideyuki



後ろはファラオの軍隊，
前は紅海の海という
絶体絶命のピンチに
立たされたとき，
主は奇跡的に
紅海のかわいた地を
通らせられた．
主の前にひれ伏して
歩みたい．

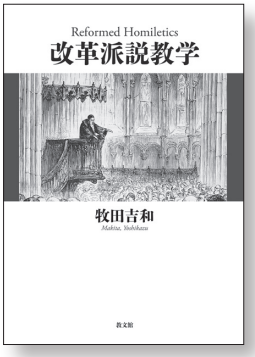
四六判・並製
定価 1,980［本体 1,800＋税］円
ISBN978-4-86325-178-6

SDG

株式会社 **一麦出版社**
札幌市南区北ノ沢３丁目 4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯 *mobile.ichibaku.co.jp*

堅実な説教学教科書

〈評者〉**小泉　健**



改革派説教学
牧田吉和著

牧田先生は神戸改革派神学校の校長を二十年にわたって務めました。市川康則先生と共に『改革派教義学』（全七巻、一麦出版社）をまとめ、そのうちの五巻を執筆した組織神学者です。このたび、後藤光三『説教学』の出版以来六十六年ぶりとなる説教学を上梓してくださいました。

説教学は実践神学に属します。本来なら実践神学者が書くべきです。しかし、今日の実践神学は「神の実践」を見失い、「人間のわざ」に傾いていることがしばしばです。説教学も「神の言葉の説教は神の言葉である」（第二スイス信仰告白）ことに取り組むことを放棄して、人間のスピーチとしてのみ説教を考えることが多いのです。右のブリンガーの定式を二〇世紀に発音し直そうとしたのは、実践神学者ではなく、教義学者のK・バルトでした。説教の神学を重んじる者たちは、バルトを出発点にして説教を考察してきました。組織神学者が説教の本質論をきちんと踏まえて説教学を展開することはきわめて重要なことなのです。（本書の「序説」でも述べられているとおりです。）

第一章から第三章が説教の本質論です。説教についての明確な定義がなされます。この定義と、バルトの定義や加藤常昭の説教理解とは、たいへん近いですが、違いもあります。その違いについて考察することを通して、自分自身の説教理解を吟味することになります。

第四章から第六章は説教における「聖書」を扱い、聖書と説教の関係、説教のための聖書解釈、旧約聖書の説教が取り上げられます。第七章は「礼拝」がテーマです。説教学においては、礼拝が扱われないことも多いのですが、礼拝とは何かを考え、その中に説教を位置づけないと、説教の役割もはっきりしません。

第八章と第九章は説教における「説教者」を扱います。説教者論は「職務」と「人格」の二つの柱を持ちます。「職務」は神の召命に基づき、それを受け止めた教会がその人を説教者として任職すること。「人格」はその人自身の資質・能力、訓練、さらには生活全体です。事柄としては「職務」の方が重要ですが、「人格」においてしばしば問題が起こります。それに応じて本書でも、「職務」を先に扱いつつ、「人格」に紙面が割かれています。第一〇章と第一一章は説教における「聴衆」を扱います。

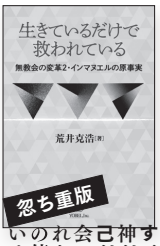
第一二章から第一八章は説教の「方法」を語っており、説教の準備から実際の演述、そして説教分析にまで至ります。第一九章以下は各論で、伝道説教、特別な場合における説教、として特に葬儀説教が取り上げられています。

ここまで概観してきたように、内容は網羅的で、神の言葉の神学の問題提起を受け止めた上で、現代の説教学が組み立てられています。なるほど「改革派」神学に自覚的に立つ部分がありますが、他の伝統に立つ人にとっても有益なはずです。読者は本書によって、説教学の基礎を身につけ、自分なりの説教学を展開するための土台を得ます。この土台にしっかり立って初めて、その後の議論（たとえば、説教における聖書の「演出」という考え方、説教における説教者についての一九七〇年代以降の議論、説教の受容の立場から説教全体を考えることなど）に、神学的にふさわしく取り組むことができるようになります。

（こいずみ・けん＝東京神学大学教授）

（A5判・五〇〇頁・定価六六〇〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内



荒井克浩［著］

生きているだけで救われている

無教会の変革2・インマヌエルの原事実

すべての人は、すでに無条件に、救われている！神が無条件に人と共に在る――かつて滝沢克己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会の流れを汲む著者が伝道者生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。福音本来の使信に立ち返った清々しさが全編に溢れている！　四六判上製・三六〇頁・一八七〇円



広瀬由佳［著］

神のいのちの物語

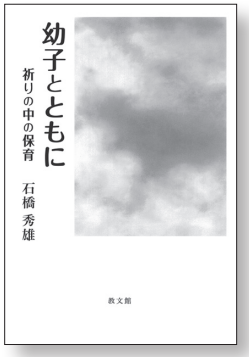
新書判・三二八頁・一六五〇円

山崎ランサム和彦氏推薦　本書は単なる抽象的な神学書ではありません。語られているのは、「神の物語」であるとともに、自身も弱さをかかえ、傷つき悩みながらも神のいのちに生かされ、他者を生かす人生を追求している一人の信仰者としての著者自身の物語です。……結末に至っていない、未完の物語です。

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

祈りの保育の背後にある「子ども性」への賛美

〈評者〉 **大豆生田啓友**



幼子とともに
祈りの中の保育
石橋秀雄著

私と石橋先生との出会いは、私が幼稚園で保育者をしていた三〇年以上前にまでさかのぼるのです。その後、私が大学の教員になってからも、キリスト教保育連盟の研修委員としてご一緒させていただき、とても親しくさせていただきました。その当初の出会いの頃から、石橋先生の保育実践は私の常識をはるかに超えたものでした。

例えば、幼児との礼拝に関して、子どもの声や、笑い、子どもとのやりとりを大切にしたものでした。当時の私の知っているキリスト教保育の礼拝は、子どもを静かにさせて話を聞かせる統制的なスタイルが多い中で、驚愕し、またワクワクしたことを覚えています。しかし、この考え方は、「日本の幼児教育の父」とも言われ、現代のわが国の幼児教育・保育の源流ともなっている倉橋惣三（一八八二―一九五五）の宗教教育論に通じるとずっと考えてきました。倉橋は、若いころ、内村鑑三との接点からその聖書研究会に出ていたことが、彼の宗教教育論につながっていたと言えるでしょう。その日曜学校論では、フレーベルの幼児教育論も背景にしながら、幼児の本性を阻害しないものでありたいと述べています。また、「いつものお定まりのお話しに欠伸をさせるよりは、広やかな野へ連れ出して、草の上に花の陰に鳥の音楽に、神の喜びを讃えしめた方が、如何に児童の為に活々した宗教教育が出来るかと思う」とも述べているのです。さらに、その宗教教育は、「子供に対する深き熱き関心」であるとし、それは「教師その人の感化」だと言います。倉橋の宗教教育論は、石橋先生の実践にも通じることがわかります。

本書においても、そうした石橋先生の一貫した保育の姿勢が見えてきます。石橋先生は子どもの遊びを徹底して大

切にしているだけではなく、いっさい禁止をせず、先生そのものも子どものように一緒に本気で遊ぶのです。子どもは園長には殴ったり蹴ったりしてもよいと書かれていますが、思わず笑ってしまいました（普通の専門性ではありえない）。しかし、こうした子どもの「遊び」や「子どもらしさ」を大切にするだけではなく、大人である石橋先生自身も「遊び性」や「子ども性」にあふれているのです。

実は、人のウェルビーイング（幸せな状態にあること）を考える際、この子どもらしさの特性や遊びが持っている特徴は、子どもだけではなく大人にとっても大切だと考えられているのです。つまり、何かにワクワクと夢中になること、楽しさや充実感があること、不思議さを感じること、修正可能な目的を生み出し試行錯誤（探求）できること、ルール通りではなくはみ出して考えられること、想像性や創造性がはたらくこと等々。こうした「遊び性」や「子ども性」は、乳幼児にとって大切なだけではなく、生涯にわたる人のウェルビーイングにとっても大切な要素となるのではないかと考えられます。石橋先生の保育論、あるいは牧師としてのお仕事における幼児と共にある「祈り」の視点には、子どもおよび子ども性への賛美を感じるのです。一読されることをお勧めします。

（おおまめうだ・ひろとも＝玉川大学教育学部教授／こども環境学会会長／こども家庭庁・こども家庭審議会委員）

（四六判・二九四頁・定価一六五〇円・教文館）

黙想シリーズ

聖書 聖書協会共同訳

日々の黙想

今ここに気付く

150の祈りと瞑想

各黙想に、
聖書の言葉と
瞑想の実践法を掲載
対象中学生から

神と共に自分自身でいるために
クリスチャンのための
マインドフルネス実践入門

NEW



著者



アイリーン・クレイゲル 著
（心理学者）

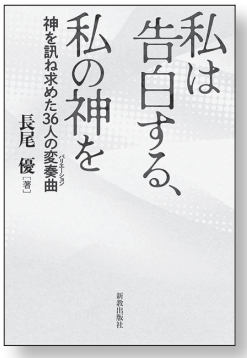
合成皮革装・スリーブ入
天地175×左右110㎜　360頁
税込価格 2,640 円
ISBN978-4-8202-9294-4

150th 1875-2025 JBS
日本聖書協会

■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
https://www.bible.or.jp

もう一つの「神さまの話」の多彩さ

〈評者〉**森　一郎**



私は告白する、私の神を
神を訊ね求めた36人の変奏曲（バリエーション）
長尾　優著

本書は、イメージあふれる装幀を次々に手がけている長尾優氏の三冊目のエッセイ集である。文体は、静謐でありながら情感に富み、音楽的である。二〇二三～二五年度の『福音と世界』に連載された三六編がまとめられ、通読できるようになった。

成立事情からしてもちろんどの章から読み始めてもよいが、本書には一貫したモチーフがある。「まえがき」にある通り、〈より大きな神〉を訊ねる道行きである。地上で力をふるう既成宗教によって祭り上げられている信仰対象を〈より小さな神〉とあえて呼び、それに比べて、個人の魂の奥底にひっそり隠れ潜んでいる無力このうえない存在を〈より大きな神〉と逆説的に名づけることから、本書は出発する。その信念ゆえに正統派からは異端者、背教者呼ばわりされ、神をなくした者との烙印を押された人びとが抱いてきた〈私の神〉の観念の数々を、著者は愛惜をこめて詳らかにしている。

全三六章で紹介される信念の人びとの多彩さには目を瞠るものがあり、彼らに注がれる著者のまなざしは等しく慈しみに満ちている。破門の哲学者スピノザ。二〇世紀のユダヤ人哲学者、ヨーナス、アーレント、レヴィナス。『白痴』でキリストを描こうとしたドストエフスキー。聖なるものを追い求めたドイツ詩人、リルケ、ヘルダーリン。このあたりまでは定番と言えなくもないが、ヘルダーリンの魂の同伴者ズゼッテ・ゴンタルトに一章を捧げているのには唸らされる。王宮の水溜めに放り込まれた預言者エレミヤを救ったエチオピア人宦官エベド・メレクが、精神の闇に沈んだヘルダーリンの面倒を長年見た指物職人エルンスト・ツィンマーに比せられるのにも、ハッとさせられる。

『悲愴』を遺した晩年のチャイコフスキーがスピノザを愛読していたというのも、発見的である。前田（のちの神谷）美恵子との愛に生きようとして夭折した美学者野村一彦。岡倉天心と深い交流のあったインドの女性詩人プリヤンバダ・デーヴィー。彼らの魂の内奥には神との対話があった。

シャーロット、エミリ、アンのブロンデ三姉妹。イギリス作家トマス・ハーディ、アメリカ詩人エミリ・ディキンスン、ユダヤ作家アイザック・シンガー、黒人女性作家アリス・ウォーカー、アイヌ伝承者知里幸恵、アメリカ先住民チーフ・シアトル。荻原碌山、九鬼周造、木下順二、辻邦生、山本周五郎、雨宮雅子。大読書家の引き出しの多さに驚かされる。

最終章では、アウシュヴィッツで犠牲となり、四〇年後に日記が刊行されたユダヤ人女性エティ・ヒレスムが取り上げられる。ナチスドイツ占領下のオランダに生き、強制収容所に送られるという、ぞっとする惨事のただ中にあっても、エティが「人生は美しい」と言うことができたのは、「私の内にある小さな神の欠片（かけら）」を助けなければ、という決意ゆえだった。「私の一人の心の井戸の中に隠れ潜んでいる内在する神」――ここに、〈より大きな神〉を訊ねる道行きはクライマックスを迎える。それは同時に、第三章のリルケ論へ立ち戻る道行きでもある。「限りなく内面化された神の概念」の変奏曲を奏でる本書は、リルケ没後百周年に出るべくして出た、もう一つの「神さまの話」である。

（もり・いちろう＝放送大学教授／哲学）

（四六判・二五一頁・定価二四二〇円・新教出版社）

日本における聖書普及
事業150年記念出版

旧約聖書
詩篇
四訳対照

文語訳　口語訳
新共同訳
聖書協会共同訳

歴代の聖書を、
詩篇で読み比べ、
味わってみませんか。



ハードカバー・ケース入
天地210×左右210㎜
文字の大きさ約８ポイント
厚さ29mm　422頁
定価 3,960円
（本体 3,600 円＋税 10%）
ISBN978-4-8202-4276-5

150th 1875-2025 JBS
日本聖書協会
■お求めは全国のキリスト教専門書店
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
https://www.bible.or.jp

†本・批評と紹介

手を携えて、女性の司祭按手30周年へ　そしてその先へ

〈評者〉**吉谷かおる**



大韓聖公会女性司祭按手20周年記念集
私たちの司祭
共に歩き出す女性たちの道
大韓聖公会 全国女性聖職者会著
ドミニカ朴・美賢代表執筆
関　澄子訳

このたび、大韓聖公会女性司祭按手20周年記念集『共に歩き出す女性たちの道―私たちの司祭』が関澄子さんの翻訳により日本語で読めるようになったことを、心から喜びたい。多くの方が本書を手に取り、この女性たちの苦難の道のりを共にたどってくださることを願う。現在、日本聖公会沖縄教区司祭として働いておられる代表執筆者の朴美賢（パクミヒョン）司祭は、「司祭に按手されるまでどれほど多くの女性が福音を発見し、自身の道を黙々と歩み、強制された沈黙と差別を破り自分たちの声を出すためにどのように連帯したかを記録することはまさしく心躍るものでした」と語っている。この「私たちの司祭」の物語は、歴史と宣教の主体として生きる「私たちの物語」でもある。

聖公会には、主教、司祭、執事の「三聖職位」があり、按手を受けた聖職と、信徒との間には区別が設けられ、主教制を中心とした組織体制をとっている。大韓聖公会では２００１年（日本聖公会では１９９８年）に女性の司祭按手が実現するまで、司祭職は男性に限られていた。大韓聖公会で聖職への召命を受けた女性たちに、どのような労苦があり、どれほどの涙が流されてきたか、本書によってつぶさに知ることができる。日本と同様に、女性が司祭となったのちの司牧の現場においても、差別と排除を経験し、茨の道を切り開きながら進まなければならなかったことにも痛みをおぼえる。

本書が記す女性の宣教の歴史のはじめには、婦人伝道師の人生と活動が大切に書き留められている。その歴史は、戦争による荒廃から起ち上がった１９６０年代の女性組織（オモニ会、ＧＦＳ）の結成、80年代の「若い女性の会」の活動へと続き、90年代には女性たちの連帯から「聖公会

女性連合」の働きが生まれた。女性の聖職実現に向けて「聖公会女性連合」は、女性の指導力を開発するため「女性聖書教室」を開設し、政策に女性の視点を反映するため「女性政策協議会」を開催した。その中で大韓聖公会の女性史編纂と女性会館（現女性宣教センター）の建設も提案された。１９９１年、まずソウル教区に「女性聖職委員会」が設置され、「女性聖職受容案」の検討を経て、２００１年、ついに閔炳玉（ミンピョンオク）執事（釜山教区）が女性として初めて司祭按手を受けた。それは神学校卒業から22年後のことだった。２００４年に司祭按手を受けた柳明姫（ユミョンヒ）執事は、１９８９年に執事試験を受けてから8年間判定を保留されていたという。そういった胸の痛くなる物語もここには含まれている。付録1の論文「聖書は女性聖職に反対しているのか」も、当時の議論を記録するものとして貴重である。

プロテスタント主流派ではかなり前から「女性の按手」が行われているが、今日なお按手を待ち望む教派の女性たち、按手後にも不当な処遇に苦しむ女性たちがいる。女性の按手は、平等な立場で教会の働きに参与するための突破口であり、信徒を含む女性たちが発言力を高め、リーダーシップを発揮していくうえで、今も重要で象徴的な意味を持ち続けている。日本聖公会では２０２８年、大韓聖公会では２０３１年に女性の司祭按手30年の感謝の時を迎える。強固な家父長制に抗って自ら生きる道を選び歩くことの困難さを分かち合える韓国の女性たちと、これからも手を携え、希望を胸に進んでいきたい。

（よしたに・かおる＝日本聖公会　女性に関する課題の担当者）

（四六判・二二四頁・定価一八七〇円・ヨベル）



いっぽん指で弾く
礼拝讃美歌伴奏集

西村ひかり＊編／菱田麻耶＊編曲



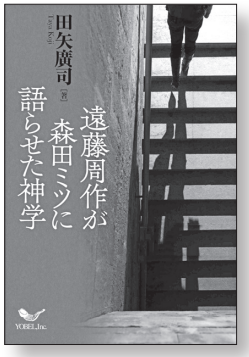
シンプルなメロディーだけの楽譜に，音符が読めない人のためのドレミを振っている．オルガンを弾いたことがない方にこそ，この楽譜集をすすめてほしい．礼拝の流れを考えた13曲で礼拝奉仕ができる．

A4判・並製本
定価2,200［本体2,000＋税］円
ISBN978-4-86325-175-5

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢３丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

イエス像を遠藤文学から聞く

〈評者〉**城前和徳**



遠藤周作が森田ミツに語らせた神学
田矢廣司著

田矢廣司氏は、一九六八年一二月（二〇歳）に恵泉バプテスト教会（日本バプテスト連盟）にて、信仰告白・バプテスマを受けて後、聖書を通して自らの生き方を、主イエス・キリストにあって生きることを自らの人生で問い続けて来られた方です。

本書は、田矢氏が主イエスに出会い、主イエス・キリストに在って生きる人生を問う只中にあって、遠藤周作文学と出会い、チャレンジとして遠藤周作の語る神学について考察したものです。

著者は本書のタイトルを「遠藤周作が森田ミツに語らせた神学」と記していますように、遠藤文学から神学を聞いていくユニークな試みを取っています。森田ミツと言えば『私が・棄てた・女』が浮かびますが、著者は他の4つの小説にも登場することに注目し、異なる5人の森田ミツ像から遠藤周作のイエス像を導き出そうとしています。言葉を変えて言えば、遠藤周作という一人のキリスト者作家の文学を通して、「神の沈黙で苦しみ続ける苦悩」を自分の歩みの中で課題として取り上げている田矢氏の信仰の在り方への問いかけであるように思わされます。

私は、田矢氏がこの本で訴えています内容を読ませていただく中にあって、改めて聖書から聞くということはどういうことかを知らされます。

遠藤周作が森田ミツという女性を介して、イエス理解を語っている「イエス像」のテーマを著者は序で「もし…」という言い方で表しています。

森田ミツという女性との出会いにおいて、罪と気づき、イエスの顔、他人の罪をも自らに取り込む良心の気づき、醜い部分の気づきを示す描写になっています。まさに、

「ミツは他者の罪を背負う」、「罪の気づきと良心の覚醒」をテーマにしつつ、これらの課題を「十字架の神学」へと展開しています。さらに、森田ミツに出会った男たちを通して「主を見捨て逃げた使徒たち」に考察を進め、純朴な娘森田ミツが遭遇する不幸に注目し「なぜ神は悪を許しているのか」というテーマにも挑戦をしています。

著者は、信徒として何度か主日礼拝での説教奉仕をすることがあったようで、説教原稿を作成する時に、遠藤周作のイエス像を思い越したと語っています。そこで田矢氏は、付録として説教を掲載しています。これらの説教からも著者の追い続けてきたテーマを見ることが出来ます。

田矢氏はあとがきで「文学者でもなく、神学者・牧師でもない一平信徒が文学に触れ、神学に触れながら考えてきた乏しい軌跡を知っていただければ」と語っておられます。

私は、イエス像（十字架の神学）を、遠藤周作文学か聞き取っていく試みとして考察された田矢氏の一人のキリスト者としての「主イエス・キリストへのこだわり」の歩みの姿勢を感じ取ることが出来ました。

この本を手に取って読まれた一人ひとりが、多くの出会いの中で、主イエス・キリストに出会うことを期待しています。また、神の言葉とされています聖書（聖書は信仰を与えられたその時代時代を背景にした人々の手によって書かれたことを前提として理解したうえで）を自らの目で、心で読まれることをお勧めいたします。

（じょうまえ・かずのり＝南小倉バプテスト教会協力牧師、九州バプテスト神学校　副理事長・校長）

（四六判・一九二頁・定価一八七〇円・ヨベル）

ヨベルの新刊 / 近刊案内



田矢廣司［著］

遠藤周作が森田ミツに語らせた神学

四六判・一九二頁・一八七〇円

寂しさと痕跡を通して語りかける神。その足跡を遠藤文学に訊ねて。森田ミツは『わたしが・棄てた・女』のヒロインであるばかりでなく、遠藤文学に様々な形をとりながら繰り返し立ち現れてくる。そこに作家のキリスト教信仰が到達した独自の神学が内包されているのではないか――との視点から考察された意欲的論考。説教4編付き。



広瀬由佳［著］　近刊　新書判・三二八頁・一六五〇円

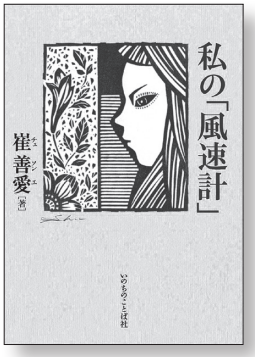
神のいのちの物語

山崎ランサム和彦氏推薦　本書は単なる抽象的な神学書ではありません。語られているのは、「神の物語」であるとともに、自身も弱さをかかえ、傷つき悩みながらも神のいのちに生かされ、他者を生かす人生を追求している一人の信仰者としての著者自身の物語です。……結末に至っていない、未完の物語です。

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4 -1-1-5F
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈（税込）

逆風をついて声が聞こえる

〈評者〉**志村　真**



私の「風速計」

崔　善愛著

本書は、『週刊金曜日』の巻頭言「風速計」として二〇一九年から今年の春までに書かれた六一編とその他の八編の文章を収めたものです。一読して、崔善愛（チェソンエ）さんご自身が「風（逆風）」の方向と強さを示す「風速計」なのだと思いました。そして、逆風は暴風になりつつあります。在日コリアンと外国籍住民に対する排外的言動が増えています。選挙のたびに「日本人ファースト」が叫ばれ、入管法「改悪」によって永住資格が脅かされ、難民申請者が強制送還されています。

第二部にある「新しい可能性を秘めて」には、崔さんが一九八一年に「外国人登録」の指紋押捺拒否に対する起訴と裁判、さらに国が制裁として「再入国不許可」を課したこと、アメリカ留学からの帰国時に特別永住権がはく奪され、そのこととたたかわれたことが記されています。また、「一九四六年、十六歳の父――北から南へ」、「日本と朝鮮戦争」、「知ってほしい今も取り残されている朝鮮人遺骨のこと」には、お父さまの崔昌華（チェチャンホア）牧師のご生涯と人権のたたかいが証しされています。これらのたたかいのいかに厳しく意義深かったことか！

崔善愛さんは、「『風速計』を書くことは……現実を引き受ける覚悟のようなものだった」と述べたうえで、「とくに在日朝鮮人の声を伝えたいと毎回、七転八倒しつつ、……現実から逃げるな、と自分に言い聞かせながら、なんとか続けてきた」（一九一ページ）と振り返っておられます。その覚悟のほどは、「怒涛のような現実に抗う、私は一本の杭でありたい」（一二九ページ）に明らかです。

ピアニストである崔さんは、どのようなかすかなものでも在日の声を聞こうと努めてこられました。聞くことは真

実を明らかにし、間違いをただす力を生み出します。「どんなかすかな声にも耳を傾ければ、壁の向こうからも、侵略と暴力の被害者の嘆きが聞こえる」（九五ページ）。「あのおそろしい時代にこれ以上引き戻されないために、証言者の声に耳を傾けよう。真実は人びとの記憶の中にあり、良心ある声こそが道を開く」（三五ページ）。

ピアニストは、ショパンがそうであったように非暴力抵抗の表現者です。「私にとっては、舞台が抵抗を表出する場だ。……暴力への抵抗を舞台で思いっきりうたい、奏でたい」（八八、八九ページ）。「『歓喜』への道は遠い。歌をうたい歩こう」（一三ページ）。

そして、確言。「私たちの人権は、だれかが声をあげたからこそ獲得できた。変えられることを信じよう」（三一ページ）。「社会は闘えば変わるんだよ（崔昌華牧師）」（八五ページ）。

本書にあるように、崔昌華牧師と在日大韓基督教会小倉教会は、強制連行された朝鮮人炭鉱労働者の遺骨六五体を筑豊のお寺から引き取り、納骨堂「永生園（ヨンセンウォン）」を建立しました。そのうちの一七体は飯塚市にある二つの寺からのもので、実は二寺とも私の住む鯰田（なまずた）にあります。鯰田には三菱と麻生の炭鉱がありました。加えて、飯塚市営墓地内の「無窮花堂（ムグンファ）」には多くの朝鮮人の遺骨が納められており、帰郷を果たせないでいます。

逆風をついて声が聞こえます。「これはあなたの問題なんですよ」（本書引用の井上洋子さんの言葉）。

（しむら・まこと＝日本キリスト教団飯塚教会・直方教会牧師、田川教会代務）（B6判・一九四頁・定価一九八〇円・いのちのことば社）

神学ダイジェスト140号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にあって、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2026年６月発行
A5版120頁
定価638円（税込）

特集　今日のカトリック倫理神学

AI技術の規制――執事としての管理責任――　秋葉　悦子
倫理的行為者としての集団　J・F・キーナン
良心と根本的選択　竹内　修一
教皇フランシスコの技術主義パラダイム批判　W・オニール
AI倫理学のために　P・シャーツ
性に関する罪と聖体拝領　R・W・マケロイ枢機卿
――LGBT、離婚した再婚者の包摂への批判に答えて――
古代イスラエルにおける民主化プロセス　K・シュミート

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044　Tel＆Fax（03）3594-4349
E-mail　shing-dt@netjoy.ne.jp

†本・批評と紹介

インマヌエルの恵みを豊かに提示

〈評者〉**横田法路**



主イエスと共に歩む旅路

朴　清民著

朴清民先生の新著を一読させていただき、驚きました。まだ若い先生ですが、長年牧会してきた牧師のような霊的気づきの深さと豊かさを、流れるような美しい文章のなかで分かち合ってくださったことに感動を覚えています。たくさんの頁に線を引き、書き込みをしながら読み、そのいくつかは自らの説教の中でも分かち合わせていただきました。以下では、特に心に残ったところを記させていただきます。

第一に、キリスト者のこの地上での人生は、主イエスのみこころに従う旅であるということです。具体的には、「キリストのように生きて、キリストのように死んでいく旅路であり、またキリストの心を心としてキリストにならう生き方を形作って、実を結んでいく旅路」（ハワワース、ウイリモン）です。

第二に、その信仰者の旅は、決して一人の孤独な旅ではなく、主イエスと共に歩む旅です。この神が共におられるというインマヌエルの恵みこそが、キリスト者の最高の恵みであると、ジョン・ウエスレーの臨終の時の言葉を紹介しつつ、宣言します。

「もっとも素晴らしいことは、神様が私たちと共にいることです（The best of all is God is with us.）。」

第三に、そのインマヌエルの恵みを実際に体験するには、日常生活の中で、「主が共におられることを意識する」ことの大切さ、その訓練の必要性が強調されています。単なる知的理解にとどまらず、生活の様々な場面で共におられる主をどれだけ意識できるかが、クリスチャン生活の祝福の鍵なのです。このような臨在の主を意識する歩みが身についてくるとき、私たちは、様々な誘惑に打ち勝ち、不安

や緊張が和らぎ、喜びへと変えられていくのです。

第四に、この主イエスとともに歩む旅は、同時に、教会共同体としての歩みでもあります。主イエスが共にいてくださるインマヌエルの恵みは、キリストのからだである教会を通して具体的に経験され、また豊かにされていくのです。その教会を健全に建て上げていくために、神学的教理的学びも大切であるし、日々の教会での他の人との具体的な関わりの大切さについても、丁寧に語られています。牧師と信徒による共同牧会、自己中心との戦い、とりなしの祈り、日常生活の分かち合い、食事を共にすることなど。

わたし自身牧会20年以上が経過する中で気づかされてきたことを、本書は見事に言葉化してくれていて、何度も頷きながら読んだことであります。

それにしても朴先生はこのような知恵をどこから得たのでしょうか？　それはこの書のテーマでもあるインマヌエルの恵み、すなわち、朴先生自身が主イエスとともに歩み続けていくなかで、主からいただいた知恵なのです。生活や伝道・牧会の中で起きてくる様々な問題、葛藤、不安、弱さ、失敗を隠すことなく、正直に打ち明けます。しかし、それらから目を背けるのではなく、まさにそのところに共におられる主を見上げるのです。その時々に、主が教えてくださった悟りの集積が本書なのです。

主の教会を愛する牧師も信徒も、この本を通して大きな恵みを受けることでしょう。心から推薦いたします。

（よこた・ぽうろ＝日本イエス・キリスト教団福岡教会牧師、関西聖書神学校講師）

（四六判・二七二頁・定価一八七〇円・ヨベル）

ボンヘッファーに出会う旅

宮田光雄講演録

60年に及ぶ著者のボンヘッファー研究の道程を回顧し、ボンヘッファーの今日的な意義に説き及ぶ。また付論「ポリフォニーとしての生――ボンヘッファーにおける愛の構造」と初公開の写真資料も収録。



定価 1,100円（税込）

エッサイの木
―本と雑貨の店―
〒980-0012
仙台市青葉区錦町1丁目13-6
エマオビル1階
022-223-2736
shop@essainoki.jp
発行：(株) CBS 仙台

著者独自の贖罪理解を示す

〈評者〉**西原智彦**



完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った
ルカの福音書説教集4
岩本遠億著

本書は、岩本遠億氏によるルカ福音書連続講解説教集の第四巻で、二一―二四章を扱う完結編である。十字架と復活を、人として完全な愛を貫いたイエスが悪魔に勝利した出来事として描く。ユダヤ文化を丁寧に説明し、自身の信仰体験を重ねる説教には、知性と情熱のうねりがある。

罪・死・悪魔に対する神の勝利を、古代教会以来の贖罪理解として再評価したのは、グスタフ・アウレン『キリストの勝利』（一九三一年）であった。他方、ルカ研究では、J・H・ネイリーが、オリーブ山の祈りをルカ四章一三節の「時が来るまで」が示すサタンの再攻撃として読み、S・R・ギャレットは、公生涯から昇天までを悪魔との継続的な戦いとして論じた。本書も第一巻以来、この主題を一貫して展開している。

第一巻では、荒野の誘惑を十字架回避の誘惑として捉え、第二巻ではペテロの信仰告白を、十字架によって悪魔に勝つメシアの啓示として読み、第三巻ではエルサレムへ向かうイエスを、死と悪魔に勝利する王として描く。こうして第四巻の主張は、全巻を貫く神学的到達点となっている。本書は説教集であると同時に、岩本氏独自の贖罪論を最も明瞭に示す一冊である。

ただし、岩本氏の贖罪理解は、アウレンのいう「神対悪魔」ではなく、徹底して「人対悪魔」である。「神がではなく、人が悪魔に勝たなくてはならない」（六七頁）、「生身の人間として、丸腰で悪魔の攻撃のすべてを身に受けて勝利しなければ」ならなかった（八一頁）と語り、迫害者のために祈り、愛し通した「完全な愛」に勝利の核心を見る。父なる神も、「人は悪魔に勝てる！」とイエスを信頼された方として描かれる。

この強調は、本書の独自性であると同時に、ルカ文書から吟味を要する点でもあろう。ルカ二四章六節の「復活なさった」は、ギリシア語では受動形であり、使徒二章二四節は「神はこのイエスを…復活させられました」と、復活を父なる神の能動的な業として語る。人としてのイエスの従順と愛を強調しても、その勝利は、父なる神によって「起こされた」復活と切り離せない。「信頼された」で終わる父神論が、ルカの復活理解を十分に表すかは問われるべきだろう。

一方、怖じ惑う弟子たちに対しては、イエスが神の子としての権威を放棄された以上、彼らが力を失うのも致し方ないとして、情け深い眼差しを向ける。イエスは彼らの弱さを受け止め、復活後も「私たちに合わせてくださる方」（一八四頁）として描かれる。岩本氏自身の聖霊体験も力強く、時にユーモラスであり、説教者の人柄を身近に感じさせる。

歴史背景には二つの留保が必要である。ヘブライ語ツェダカーの基本義は「義・正しさ」であり、第二神殿期に施しが義の代表的実践となっても、その原義を「施し」とするのは慎重であるべきだ。また、過越の四杯はミシュナに明記される後代の定型であり、その順序をそのままイエス時代へ遡らせることにも、慎重さが必要だろう。

それでも、人としてのイエスが暴力に暴力で応じず、完全な愛によって悪に勝つ姿を描き切る本書は、贖罪を抽象的教理としてしか受け取れなくなった読者に、実在的な福音の響きを届ける。ルカ文書の説教集が使徒言行録まで刊行されることを期待したい。

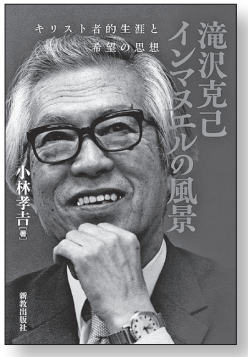
（にしはら・ともひこ＝金剛バプテスト・キリスト教会牧師）

（新書判・二〇〇頁／口絵カラー一丁・定価一三二〇円・ヨベル）

†本・批評と紹介

懐疑の森から、いのちの水の流れるインマヌエルの風景へ

〈評者〉**芝田豊彦**



滝沢克己
インマヌエルの風景
キリスト者的生涯と希望の思想
小林孝吉著

本書は、インマヌエル（神われらとともにあり）という根源的事実を生きた一人のキリスト者――滝沢克己（一九〇九～一九八四年）の生涯をたどりつつ、かれの思想を読み解く本格的評伝である。内村につらなる無教会派の信仰を持つ著者の小林氏にとって、キリスト者的生涯とは、まさに「インマヌエルとともに生きる」ということなのである。

人は誰しも「人間は何のために生きるのか、何処から来て何処へ行くのか」という存在の問いを発せざるを得ない。しかし、その問いの困難さ、また競争社会を生き抜くという現実的要請の故に、多くの人はみずからを欺き、あたかもそのような問いなどなかったかのように生きていく。しかしその問いを無視したという不安が、その人を去ることはない。

このような存在の問いに対してとくに感度の鋭かった滝沢は、苦闘の末に、幸いにも西田哲学、バルト神学に遭遇し、「存在の懐疑の森」を脱する。いやむしろ、かれらの思想に響く「インマヌエルの声」を通して、懐疑と罪の深い森が、永遠のいのちの河が流れる黙示録的な「インマヌエルの風景」へ変貌したのだ。本書では、インマヌエルについて、風、光（光源、光点）、水、いのち、声（呼び声）、といった詩的な比喩ないしイメージが随所で用いられる。小林氏は神学や哲学にも造詣が深いが、私（評者）自身は、かれを本質においてすぐれた文学者だと思っている。本書が厳格な思索、緻密な考証に基づいているにもかかわらず、各章があたかも一編の詩のように感じられるのは、小林氏の文学的資質によるのではなかろうか。

小林氏は滝沢の著作を丹念に読み、それに関連する文献

や資料もじつによく読まれている。驚嘆に値するほどである。例えば、バルトと滝沢の『往復書簡』（新教出版社）も活用される。その成果は、例えばエピローグの注14で示される。ところで滝沢は受洗を長年ためらうが、これが「バルト神学になお残るただ一つの疑問」に関連することも、『往復書簡』で如実に示される。また滝沢克己著作集全十巻に収録されなかった戦時中の「誠と取引」という作品も、本書で取り扱われる。この作品の「我々が天皇によつて生れ、天皇によつて死する」（124）というような表現は誤解されやすい。しかし小林氏は、この作品も、「どこまでもインマヌエルからのみ解されなければならない」（126）ことを強調する。たしかに神と人の原関係が、天皇と臣下の関係に単純に同一視されているというような滝沢批判もあるが、例えば戦前の講義草稿で、「君〔＝天皇〕の民として、親の子として我々の在るという事実」を、神ともにいますという人生の根本的事実の明らかな「象徴」（135）と見なす滝沢が、上記のような同一視をするはずがないのである。

さらにドイツ語論文「キリスト論の根本問題」（一九五五年執筆）が内容に踏み込んで論じられるのは、本書が初めてなのではないか。「まさにこの同じイエスが、永遠で不可視の人間的原型である限り、あの時あの処でマリアから生まれたあの形姿を、必ずしも取ることはなかったのである」（343）というような発言が、同論文から引用される。ふつうのキリスト者にとっては驚くべきこのような発言も、イエス・キリストのペルソナの統一という問題、バルトに対する疑問に関連しているのである。

最後に著者の美しいイメージを紹介して、書評の任を終えたい。小林氏は青年期に椎名麟三に取り組むなかで、次のような体験をする。「私のなかに水の流れていない川があった、その川にいのちの水が流れはじめた、みるみるその両岸はその水の流れによってつながっていく、新しい自由の風景を見たのだ。――矛盾！　矛盾とは、その川の両岸のようにいのちの水によって、矛盾のままにつながっていたのだ！」（446）。「いのちの水」とはインマヌエルのメタファーであり、上の光景はまさに「絶対矛盾的自己同一」の詩的なイメージとなっている。多岐のテーマにわたる本書をぜひ一読していただきたい。

（しばた・とよひこ＝関西大学名誉教授）

（四六判・四五四頁・定価三八五〇円・新教出版社）

既刊案内（2026年6月～7月）

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
近藤勝彦	**信徒のための信仰入門** ――三要文と日本基督教団信仰告白を学ぶ	B6	276	2,530	教文館	6/17
河村従彦	**宗教二世、教会二世** ――自分を取り戻すための心理カウンセリング	四六	210	2,200	教文館	6/24
小河信一	**七十人訳ギリシャ語・哀歌の和訳** ――原典ヘブライ語と七十人訳の比較分析	A5	144	1,980	ヨベル	6/20
大韓聖公会全国女性聖職者会著 ドミニカ朴・美賢代表執筆 関澄子訳	大韓聖公会女性司祭按手20周年記念集 **私たちの司祭** ――共に歩き出す女性たちの道	四六	216	1,870	ヨベル	6/20
松木充	**神の子、イエス・キリストの福音** ――「マルコの福音書」連続説教	四六	416	1,980	ヨベル	6/27
西村ひかり編 菱田麻耶編曲	**いっぽん指で弾く礼拝讃美歌伴奏集**	A4	130	2,200	一麦出版社	6/21
長尾優	**私は告白する、私の神を** ――神を訊ね求めた36人の変奏曲（バリエーション）	四六	251	2,420	新教出版社	6/22
W.パネンベルク著 佐々木勝彦訳	**神学と哲学**	A5	418	6,380	教文館	7/16
H.ベルコフ著 渡部満"	**キリスト教神学の200年** ――福音と文化をめぐる一つの旅行記	A5	488	6,930	教文館	7/24
岩本遠億	**完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った** ――ルカの福音書説教集4	新書	200	1,320	ヨベル	7/20
田矢廣司	**遠藤周作が森田ミツに語らせた神学**	四六	192	1,870	ヨベル	7/25
小林孝吉	**滝沢克己** **インマヌエルの風景** ――キリスト者的生涯と希望の思想	四六	454	3,850	新教出版社	7/23
ジャン・カルヴァン著 堀江知己訳	**イザヤ書註解Ⅲ** ――28-39章	A5	562	7,920	新教出版社	7/24
加納和寛	**これからの「共に生きる」教会のつくりかた** ――新米牧師マリと学ぶ七つの気づき	四六	208	1,650	キリスト新聞社	7/25
中島英行	**紅海をわたる** ――出エジプト記6章2節-32章14節による説教 中	四六	160	1,980	一麦出版社	7/26
山岡健	**キリスト教への道案内**	A5	104	1,320	一麦出版社	7/29

書店名	郵便番号	住　所	電　話	ファックス	URL	メール	郵便振替
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrinkan_syoten_0530@ymail.ne.jp	02350-0-874
エッサイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6　エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://essainoki.jp/	shop@essainoki.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2　千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimdo.com/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス東京	169-0051	新宿区西早稲田2-3-18AVACOビル2F（通販専門）	03-3203-4137	03-3203-4186	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	112-0014	文京区関口1-44-4宗屋関口ビル日キ販内（外販専門）	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkihan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7b.biglobe.ne.jp/~yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	名古屋市昭和区丸屋町3-16 日本キリスト教団東海教会内	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coocan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
バイブルハウス京都	606-0007	京都市左京区岩倉東五田町23 日本基督教団平安教会内（外販専門）	090-5138-7020	075-320-1844		kyoto-jbs@bible.or.jp	01010-2-594
バイブルハウス堺	591-8023	堺市北区中百舌鳥町2-87 チャペルこひつじ2F	072-255-4970	075-255-4971		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
大阪キリスト教書店	552-0003	大阪市港区磯路2-2-18 港ルーテル教会1F	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店（聖燈社）	591-8044	大阪府堺市北区中長尾町2丁1-18	072-254-2233	共用		sakaixx@outlook.jp	00970-0-172228
神戸キリスト教書店	650-0025	神戸市中央区相生町4-5-12 神戸駅前ATビル401	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwbt3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/matsuyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
バイブルハウス熊本	862-0971	熊本市中央区大江4-20-23	096-372-3503	共用		kumamoto-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花４丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は　日キ販販売部　TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2026年10月号

特集＝救いとは何か、どうしたら救われるのか（責任編集＝林巌雄）

寄稿者＝浅野淳博、魯　恩碩、加納和寛、柳下明子、鈴木道也、林　巌雄

◆**展望**　C・S・ルイスの魅力（**相川裕亮**）

◆**連載**　ズレズレなるままに（**川口弾**）、古代イスラエル史入門（**日高貴士耶**）、人物・日本キリスト教史（**戒能信生**）、ぼやき牧師のさすらい説教録（**富田正樹**）、ルカ福音書（**山﨑ランサム和彦**）他

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社　TEL：03-3260-6148

Email: sales@shinkyo-pb.com

予告

本のひろば

2026年11月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）野々瀬浩司「近代人の自由の本質を理解するための指針」

（特集）「読む・書くを考えるならこの三冊！」

（書評）教皇庁国際神学委員会著『イエス・キリスト、神の子、救い主』、上智大学中世思想研究所編訳・監修『ニコラウス・クザーヌス著作集　上・下』、H・ベルコフ著『キリスト教神学の二〇〇年』、松木充著『神の子、イエス・キリストの福音』他

編集室から

本の装丁を考えることも編集の仕事ですが、なかなか決まらず困っていたある日、初めて生成ＡＩに相談してみました。

私が「キリスト教入門書の装丁を考えてください」と言うと、ＡＩは「清潔感・希望・光・静けさのイメージがぴったりですよ」と答えました。そこからは本の方向性など、いくつかの質問に答えるだけで、ＡＩはものの数分で、優しい光に満ちた礼拝堂の絵を描き出しました。「イエス様が待っている姿を入れてください」と言うと、「制限があるので実在する人物は描けませんが……」と断りつつ、十字架の前にたたずむ長い服を着た人のシルエットも描いてくれました。

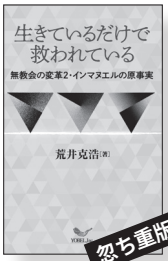
水彩画風の感じのよい絵です。うまく使えば、もっとクオリティが高く人目を惹くものも作り出せそうです。それでいて、どこかひっかかる。以来、その理由は何だろう？とずっと考えていました。

どうもあの、もっともらしい人物像が原因のようでした。人間の心と手を経ずに描かれた「キリスト像」。人格を持たないＡＩに、私たち人間と人格的に交わってくださる方を描かせることは、やはり無理があると思いました。それを読者に届けることはなおさらです。

本は単なる情報伝達の手段ではありません。そこでは著者の、読者の人格がやり取りされています。生活のさまざまな場面でＡＩが活用される時代ですが、私たちが出版する本は、人格的なコミュニケーションが行われる大切な場であることを忘れずに、本づくりに携わりたいと思わされた経験でした。

（石澤）

荒井克浩［著］無教会の変革2・インマヌエルの原事実
生きているだけで救われている

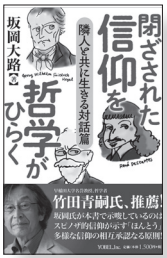


忽ち重版

すべての人は、すでに無条件に、救われている！ 神が無条件に人と共に在る――滝沢克己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会の流れを汲む著者が伝道者生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。……福音本来の使信に立ち返った清々しさが全編に溢れている！

好評発売中 四六判上製・三四八頁・一八七〇円

坂岡大路［著］隣人と共に生きる対話篇
閉ざされた信仰を哲学がひらく



すべての人は、すでに無条件に、救われている！ 神が無条件に人と共に在る――滝沢克己が見出した「インマヌエルの原事実」。無教会の流れを汲む著者が伝道者生命を賭けてこれを継承し、今の言葉に語り継ぐ。……福音本来の使信に立ち返った清々しさが全編に溢れている！

9月中旬刊行 四六判・二四六頁・一六五〇円

広瀬由佳
神のいのちの物語



反響多数

山崎ランサム和彦先生推奨！ 本書は単なる抽象的な神学書ではありません。語られているのは、「神の物語」であるとともに、自身も弱さをかかえ、傷つき悩みながらも神のいのちに生かされ、他者を生かす人生を追求している一人の信仰者としての著者自身の物語でもあります。

新書判・三二八頁・一六五〇円

説教集「答え」は遅れてやってくる
いまは分からなくても

鈴木道也［編著］



けっして解けない謎があるから、人生はふくよかで美しい！ 13人の牧師による証しを交えた信仰の妙味！

9末刊 四六判・二一六頁・一九八〇円

髙田春彦
やさしい讃美歌前奏曲オルガン曲集 第三集



この曲集は、「やさしい讃美歌前奏曲集」、「続・やさしい讃美歌前奏曲」に続く「やさしい讃美歌前奏曲」の第三集になります。讃美歌の旋律をもとにした曲で、すべて手鍵盤のみで弾けます。「讃美歌」「讃美歌第二篇」「讃美歌21」を採用しています。礼拝の前奏のみでなく、間奏、後奏など、ご自由に選んで使うことができます。

B5判・二二〇〇円

岩本遠億［著］ルカの福音書説教集 4
完全な愛が現れた・人は悪魔に勝った



「目から鱗」ってこういうことなんだ！ 愛する力、自分自身を離れて一人の人を愛するいのち、それこそが聖霊！

各巻新書判・平均二〇〇頁・一三二〇円

1 **神はあなたの真の願いに答える**
2 **聖霊は愛を完成する**
3 **ほんとうの自分に出会うとき**

ヨベル *YOBEL Inc.* info@yobel.co.jp https://yobel.co.jp **出版の手引き / 呈**（税込）
〒 113 - 0033 東京都文京区本郷 4 -1-1-5F TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

本のひろば
第八二六号　二〇一六年一〇月号
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇一六年一〇月一日発行（毎月一回一日発行）

9月の新刊　●価格表示は税込

八日目の幼子　主イエスの生涯の説教

近藤勝彦［著］

イエスはなぜ地上の生涯を生きられたのか？



イエス・キリストの降誕、生涯、十字架、復活、昇天、着座、聖霊の降臨、そして教会の誕生へ――。説教を通して主イエスの歩みを辿り、聖書が証言する神の救いの歴史を鮮やかに描き出す。教会に生きるすべての人に贈る、円熟の説教24篇を収録。

●B6判・182頁・定価2,090円

太宰治における聖書

田中良彦［著］

「入院中はバイブルだけ読んでゐた。」



教会に属することはなかったが、隣人愛をモットーとして、聖書を生涯手放すことのなかった太宰治。彼はなぜキリスト教に心を寄せたのか？イエスの言葉からどのような慰めを受けたのか？聖句との初邂逅を辿る論考を含む、太宰文学の人間観を究明する実証的考察。

●四六判・286頁＋口絵8頁・定価3,960円



アシジの聖フランシスコ伝記資料集　続編

キリスト教古典叢書　フランシスコ会日本管区［監修］　伊能哲大［訳］

12―13世紀に成立し、後代の伝記に影響を与えた源泉資料の集成。シュパイアーのユリアヌス『韻文聖務日課』『聖フランシスコの生涯』、および『聖なる交わり』『アシジの編纂文書』収載。

●A5判・300頁・定価8,250円

教文館　〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549（出版部直通）《呈・図書目録》
キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は〈e-shop 教文館〉
http://shop-kyobunkwan.com/ まで！

発行所　〒112-0014　東京都文京区関口一―四四―四　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六〇―六五二〇　振替〇〇一七〇―五―一一六七九
発行人　金子和人　編集人　村上信児　印刷所　モリモト印刷㈱
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三―三二六〇―五六七〇
定価七八円（税抜七一円）（〒63円）
一年分一三〇〇円（送料共）

本のひろば.com